

# 災害公営住宅団地における居住者コミュニティの実態調査 熊本県南阿蘇村馬立団地を対象として

川野 まど香

## 1. 研究の背景と目的

平成28年4月に発災した熊本地震は県内の広域に甚大な被害を及ぼし、被災者のために各地で災害公営住宅団地が整備された。入居する人々は地震によって住居を奪われ、新たな場所での生活を強いられる。そのため震災前からの付き合いを継続しながら、そこで新たな隣人関係を構築しなければならない。しかし、隣人関係に影響を与える団地内での住戸の位置は、市町村が抽選方式によって決定する場合が多い。その中で南阿蘇村馬立団地（以下、馬立団地）は建設戸数に余裕があり、事前アンケートを取ることで、住民のコミュニティに配慮して部屋番号を決定していた。一方で実際に足を運んでみると、表出やあふれ出しが他の団地に比べて少ない上に、屋外で活動をしている人が見受けられず違和感を感じた。

そこで本研究では馬立団地を対象とし、住民同士の関係性を調査することで、コミュニティ配慮が行われた団地における生活の実態を明らかにすることを目的とする。調査概要は表1に示す通りで、ヒアリング調査③に対し、全40世帯のうち30世帯の回答を得た。

## 2. 馬立団地概要

### 2.1. 立地条件

馬立団地は阿蘇山の麓に位置し、局地風である「まつぼり風」<sup>注2)</sup>が吹く南阿蘇村北西部の立野地区に建設された。図1に示す通り敷地の高低差を活かし、団地は3つの工区に区分され、2区に集会所を設けている。

表1 調査概要

調査	時期	調査対象	概要
表出調査	2020.09.17	全住戸	住戸周りに置かれている物品の種類と場所を記録する。
ヒアリング調査①	2020.09.10 -10.16	南阿蘇村役場建設課	住戸の割り振りや管理体制などについてヒアリングを行う。
ヒアリング調査②	2020.10.13	地域支え合いセンター <sup>注1)</sup>	集会所での活動や個人情報の取り扱い等についてヒアリングを行う。
ヒアリング調査③	2020.09.27 /09.28 /10.21	馬立団地住民	基本属性や周辺住人との関わりなどについてヒアリングを行う。

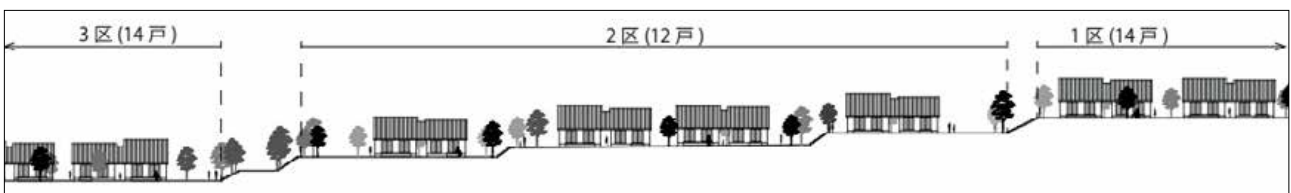


図1 南側立面図 s=1:1200

### 2.2. 住棟形式

住棟は2戸で1棟を構成する2戸1形式で建設されている。災害公営住宅で一般的に採用されている2戸1形式は住戸間の外壁を共有するものであるが、馬立団地は住戸間にもやい土間（図2）を設け、屋根のみが繋がった形式を取っている。このもやい土間はまつぼり風対策や住戸間の音の解消、コミュニケーションの場の形成を目的に計画された。また間取りの異なる住戸を組み合わせることで、家族形態や年齢層に縛られない入居者同士の交流を促す狙いがある（図3）。

### 2.3. 住戸の割り振り

入居者に対する住戸の割り振りについては表2の手順で進められた。手順3)において2戸1の両方の住宅を空き家<sup>注3)</sup>にしないこと、単独高齢者は複数世帯の隣にすること、ペットエリアと仮定した3区にペット飼育者をまとめること<sup>注4)</sup>が考慮されている。また上記3点を満たす配置内で、隣接する入居者との希望などに沿う様に決定された。

表2 割り振りの手順

住戸の割り振りに際しての手順
1) 事前調査で住民から間取りや配置の希望を聞く
2) 建設会社が団地内の住宅の配置を決める
3) 村職員でどの世帯がどの住宅に入居するかを決める

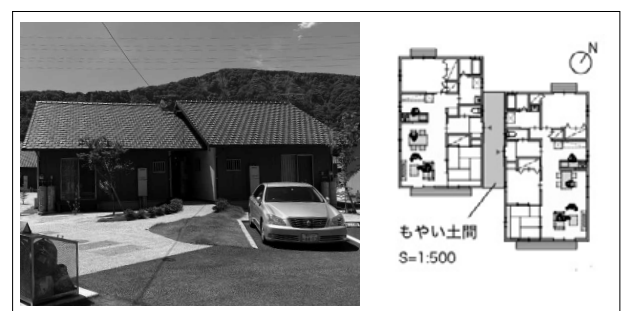


図2 住戸写真・平面図

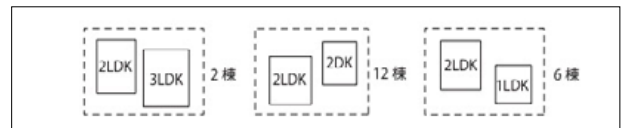


図3 ダイアグラム

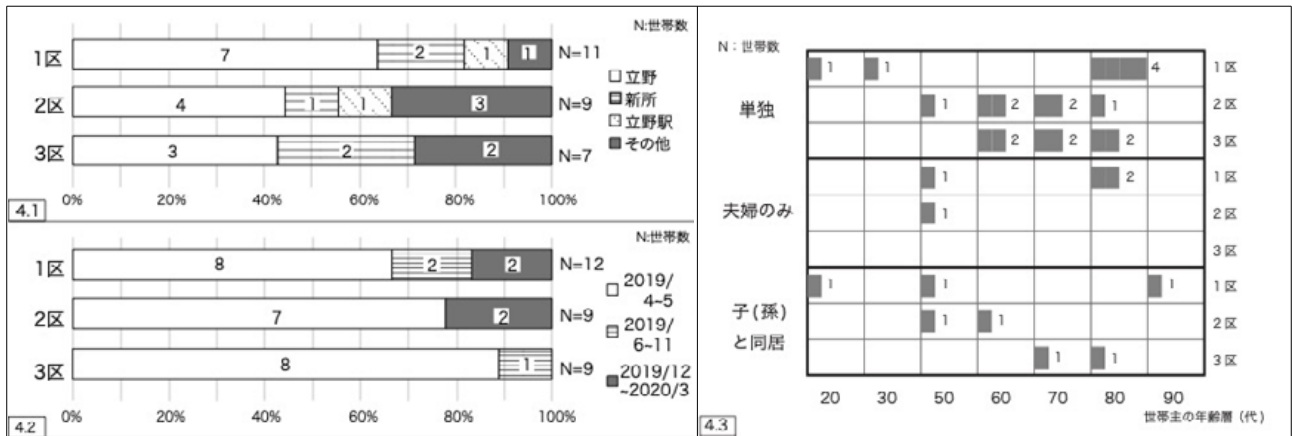


図4 工区ごとの住人の出身地域 (4.1) 入居開始日<sup>注5)</sup> (4.2) 家族形態 (4.3)

## 2.4.住人の属性

ヒアリングから得たデータより住人の属性を工区ごとにまとめる (図4)。回答率は1区が85%、2区が75%、3区が57%である。出身地は立野地区内である立野、新所、立野駅が過半数を占めており、特に1区では91%を立野地区内の住民が占める (4.1)。家族形態に関して、3区では単独で入居している世帯が少なかった。また2区においては70歳以上の入居者がいる世帯が33%と他2つと比較して少なかった (4.2)。入居時期に関してはどの工区も入居開始当初からの入居者が多く、3区では村営住宅としての入居者は見られなかった。また図5より大津町から来た1世帯を除いて、居住者は南阿蘇村内から移住して来た事がわかる。

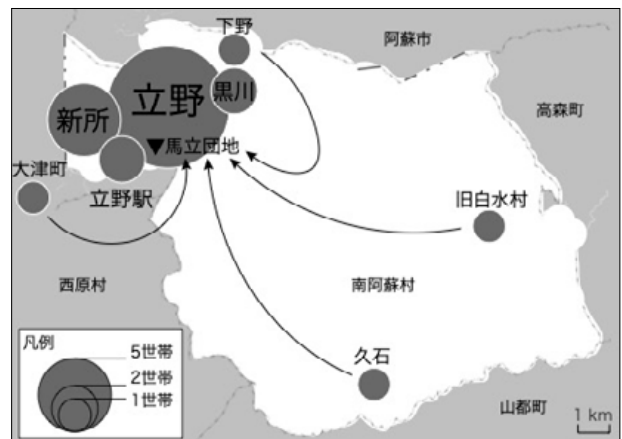


図5 従前居住地域的位置関係

## 3.住人の活動

### 3.1.住人同士の関わり

図6は団地内における住人同士の関わりを示したものである。挨拶程度の交流があると回答した人は1区が最も多く、次いで2区3区の順で、集会所での交流があると回答した人も同様であった。

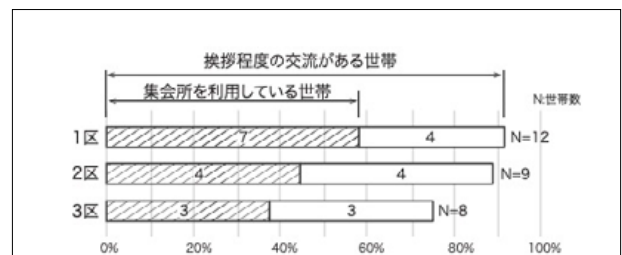


図6 団地内の住人との交流の有無

**1区:** 団地内での交流が多い1区について具体的な関係性を図7に示す。集会所に定期的に集まりラジオ体操やお茶会をしている5世帯は、80歳以上で単身もしくは夫婦で入居しており、震災前から顔見知りである。食料品の買い出しは基本的に団地に来る移動販売車で済ませており、その買い物も集まって会話をするきっかけになっている (図8)。また外国籍を持つ2世帯は集会所の日本語教室に参加しており、そこで高齢者が日本語を教えることで、多世代の交流が生まれている。他にも2戸1の住戸間で見守りの関係性が築かれていたり、工区一体として様々な交流が生まれている。

**2区:** 2区は挨拶程度の交流はあるが、1区と比較して集会所を利用している世帯が少ない (図6)。2.4章で前述した様に2区は高齢者の割合が少なく、年齢層の違いや仕事で時間が合わない事が集会所の利用者が少

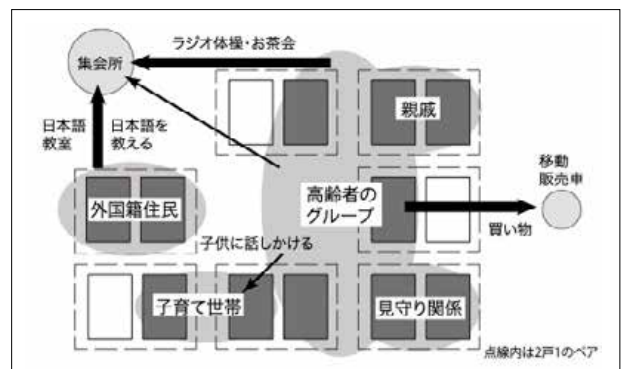


図7 1区内での住人同士の関係性



図8 ラジオ体操、移動販売車の様子

ない要因と考えられる。一方で利用者の出身地区を見てみると、2区のみで立野地区外の出身者を確認できた(図9)。ヒアリングにおいて地区外からの住民は「イベントに参加する事で団地内に知り合いができた」と答えており、集会所での集まりが新たな環境で隣人との関係性を築ききっかけとなっていた。従って2区の住民は集会所に近く、家から活動が見え、アクセスもしやすいことから、集まりに参加する意思のある住民は他の区の住人と比較して集会所に行きやすい様子が伺える。

3区：最も交流の少ない3区に関しては「団地内の住人と関わりはあるか」という質問に対しても、多くの住人が「周りに知らない人が多い」と回答した(図10)。集会所に行けない理由として主に仕事や病気が挙げられた。更に集会所を利用している人も、従前の部落の知り合いに会うことを目的としていて、新たな人間関係が構築されてる様子は伺えなかった。

### 3.2. 団地の管理体制

馬立団地単体で自治会は存在せず、住民はそれぞれ従前の地域の自治会に任意で参加しており、管理組合が団地内を管理している。管理組合長は毎年一人ずつ団地内の住人から選出され、団地外構や集会所の整備、掲示板を活用した住民への情報提供を行っている。

### 3.3. 団地内で行われている活動

支え合いセンターによる月2回のお茶飲み会や、村の婦人会による年末の餅つき大会に加え、年2回管理組合長が住人に呼びかけて団地内の美化清掃を行っている。一方で今年はCOVID-19の影響で1年目のように人を集めるようなイベントは開催できていない。また、お茶飲み会はポスティングなどをして全員に声をかけているが、参加者は決まったメンバーが多く、新規の参加者、特に男性の参加者が少ない状態にある。

### 3.4. 団地内での個人情報の取り扱い

馬立団地の住棟は類似する外観を有しているが、表札を出している住宅は一軒も見当たらず、訪問先を見つけられない来訪者が多くいると伺った。支え合いセンターへのヒアリングによると、表札は禁止していない様であったが、出してはいけないと認識している住人が複数見受けられた。また3.1章で3区に周りを知らない住人が多いと述べたが、その理由として「名前の公表を断られた事でご近所づきあいが出来なかった」と住人は答えている。現在団地内の個人情報は、南阿蘇村役場と支え合いセンターのみが管理している状況であり、住人全員の承諾が得られない限り、苗字でさえも団地内の住人に公表できない。そのため団地

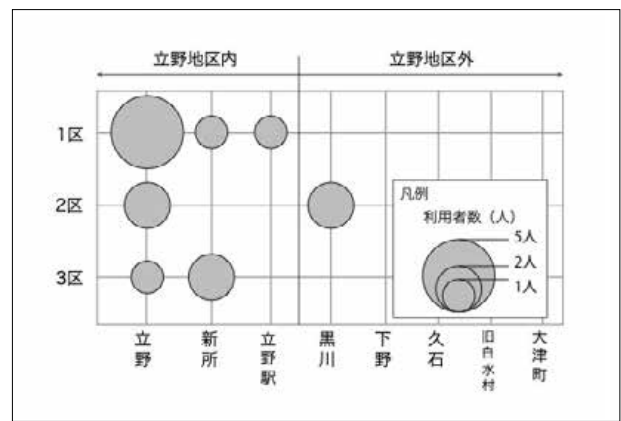


図9 集会所の利用者の出身地域

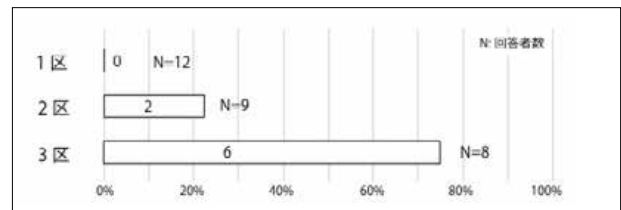


図10 「周辺住人を知らない」と回答した住人の割合

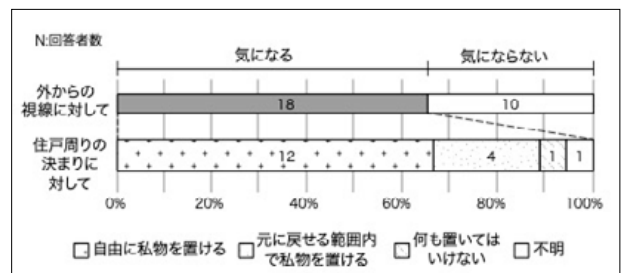


図11 外からの視線に対する意識と住戸周辺に関する認識の違い

内の活動を取りまとめている管理組合長も「自ら一軒一軒回って住民を把握するところから始めなければならなかった」と話していた。

## 4. 住戸周りの様子

### 4.1. 住民の住戸周りに対する認識

在宅中に外からの視線が気になるかという質問に対して、6%が気になると答えた。また、住戸周りに物を置いてはいけないという決まりがあるかという質問に対しては「決まりはなく、自由に置ける」「元に戻せる範囲内で置ける」と認識している住人が多く、これらは外の視線が気になると回答した人のうち88%を占める(図11)。それに関わらず、植物などを目隠しとして住戸周りに置いている人は5%で、残りの世帯はカーテンを閉めることで対策をしていた。

外に物を置かない理由として「風が強い土地柄で飛ばされると危険だから」「災害時に避難の邪魔になるから」「周りが誰も置いていないから置きづらい」という意見があがっており、今でも従前の敷地の小屋に農具等を保管している住民もいる。

また「視線が気になる」かつ「物を置いてはいけない決まりがある」と認識している住人は、役場に許可



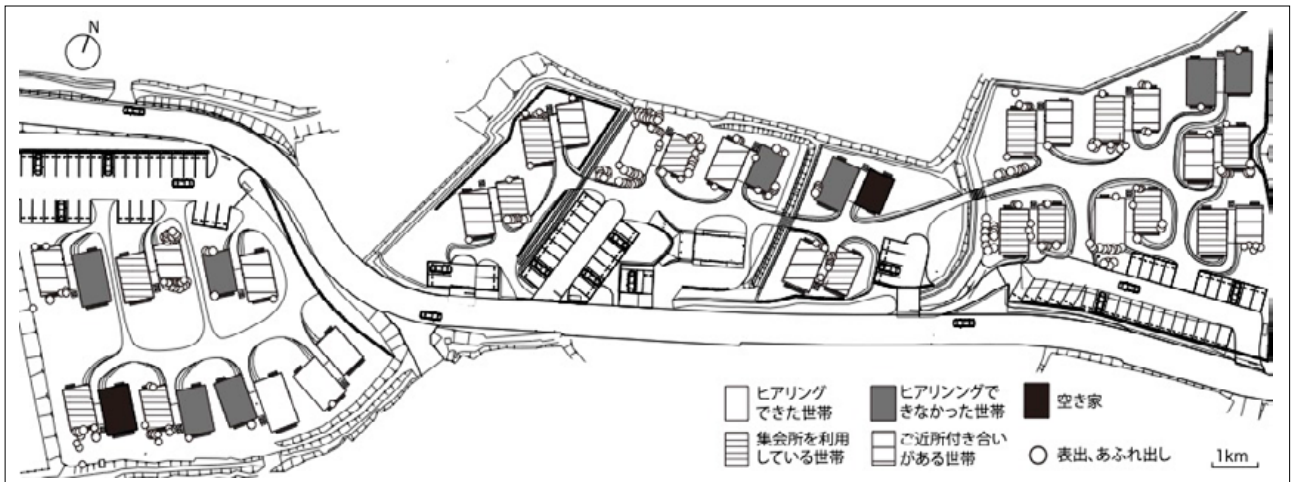


図12 表出・あふれ出しと住人同士の交流の関係

を取って植物を開口部周辺に配置していた。

#### 4.2.団地内での交流と住戸周りの関係性

図12は住戸周りに置かれている表出、あふれ出しと団地内の住人同士の関係性を示しており、周辺住人との交流が盛んな住人の住戸は比較的住戸外に物が多い事がわかる。3.4章で周辺住人との関係性が1区が多く、3区が少ないと述べたが、あふれ出しや表出の量も同様に1区が多く3区が最も少ない結果となった。従って住戸周辺の物の量は出身地域や入居時期よりも入居後の周辺との関係性の方が影響しやすいことが考えられる。

#### 5.まとめ

馬立団地の生活の実態として以下のことがわかった。

- 1) 団地内での人間関係は工区ごとに構築され、入居前からの顔見知りを中心に新たな交流が広がっている。
- 2) 住人は立野地区出身者が過半数を占め、様々な年齢層が存在しているが、集会所の利用者は立野地区出身の高齢者に偏る。
- 3) 個人情報保護の関係上住人同士を把握する機会が減っており、イベントに参加していない住人や、以前からの知り合いがいない住人は、団地内の住人と交流を持つことが難しい状況にある。
- 4) 在宅中に外からの視線が気になると回答した住人は多いが、住戸周りの管理に制限がないと認識しているが、視線を遮る物を配置する住人は少なく、カーテンを閉めて対策している。
- 5) 周辺住人との交流が盛んな住人は比較的住戸周りに物を置きやすい。

#### 6.考察・今後の展望

馬立団地は住人の生活が安定し始める入居2年目を迎えるタイミングで、COVID-19の感染が流行した。これが住人同士が仲良くなるきっかけを奪ったとも考えられるが、1区では盛んな交流が見られている。従っ

てペット飼育者を固めたペットエリアのコミュニティへの配慮が行き届かなかったこと、各工区が道路や高低差によって分断され、集会所まで行くのに住民に多くの負担がかかってしまうことが、団地内での新たな交流の発生に繋がっていると考えられる。

一方で従前の地域での関係性が強く残っている団地内において、2区で立野地区外からの居住者が新たな関係性を築いていたことから、自宅から集会所までの距離が近いと集まりなどに参加しやすいことがわかる。

また団地自体は交通の便の悪い場所に位置しているが、従前の地域での交流が続いている住人が多くいた。交通手段のない高齢者のことを考えると、従前地域との交流が継続できる工夫と、気軽に会える団地内の人間関係の形成に今後は焦点を当てていく必要がある。

更に建物自体にはまっぼり風の対策としてもやい土間が設けられているが、住戸周りの環境を考えると、物置きや住人のたまり場として風を避けられるような場所も必要である。

今回の調査で住戸周りの表出やあふれ出しと住人同士の交流には関係性があることがわかった。今後の研究で複数の団地を調査し比較することで、住戸周りの可能性を追求したい。

#### 【注釈】

(注1) 熊本県内の各市町村の社会福祉協議会によって運営され、熊本地震の被災者の見守りや、健康・生活支援、地域交流の促進などの総合的な支援を行う団体。熊本県内の18市町村に設置されている。

(注2) 阿蘇外輪山の西側の峡谷部に位置する立野火口瀬で吹く強い東風。

(注3) 災害公営住宅は必要戸数に応じて建設戸数が決定されるが、当初の入居希望者がキャンセルしたことにより空き家が発生した。

(注4) 事前調査において、喘息持ちの入居予定者からペット飼育者の家と離すよう要望があった。

(注5) 馬立団地は2019年4月から被災者の入居が開始され、2019年12月から空き家を村営住宅として公募にかけた。

#### 【参考】

南阿蘇村馬立団地設計者プロポーザルに置けるポートフォリオ